

令和3(2021)年度水稻生育診断予測事業速報 No. 1

(コシヒカリ、とちぎの星 5月25日調査結果)

令和3(2021)年5月31日
栃木県農政部経営技術課

草丈はやや高く、茎数・葉令・葉色は平年並み。
軟弱徒長や茎数過多を避けるため、有効茎が確保されたら
速やかに間断かん水に入る。(平年は6月第2半旬)
日照時間が少ない傾向にあるので、いもち病などの病害に
注意する。

1 気象概況<<4月上旬～5月中旬(宇都宮)>>

平均気温は、4月、5月とも0.7℃高く経過した。日照時間は、4月は平年の119%、5月上旬は同120%と多照であったが、5月11日から14日を除き24日まで曇天または雨天が続いた。降水量は、4月は平年の82%、5月上旬は9%、中旬は同55%と少なかった。

なお水不足による代かき移植作業の遅れは一部の地域で見られたが、影響は少なかった。

2 調査結果

(1) コシヒカリ

ア 苗調査(農業試験場、現地調査結果)

苗の草丈はやや低く(平年比92%)、乾物重はやや重く(平年比106%)、葉齢は2.6葉の平年並であった。

イ 本田における生育調査(農業試験場調査結果)

- ・草丈は28.0cm(平年比107%)とやや高く、茎数はばらつきがみられるが平均163本/m²(平年比104%)と平年並であった。
- ・葉齢は5.3葉、葉色は3.2で平年並であった。
- ・葉色×茎数値は609で平年比102%となっている。茎数はほ場によっては植え傷みや葉害等により昨年の半数程度で、茎数確保が遅れている。
- ・イネミズゾウムシの発生は、10か所中6か所で確認されている。

(2) とちぎの星

ア 苗調査(農業試験場調査結果)

- ・苗の草丈は低く(平年比76%)、乾物重は軽く(平年比73%)、葉齢はやや小

さい（平年-0.4葉）。

イ 本田における生育調査（農業試験場、現地調査結果）

- ・草丈は23.9 cm（コシヒカリ比85%、前年同期比122%）、茎数は98本/m²（コシヒカリ比60%、前年同期比111%）、葉齢は4.8葉（コシヒカリより0.5葉少ない）であった。コシヒカリと比較すると移植が6日遅いため、これらの生育量は下回っている。
- ・葉色は3.5で前年並（データ略）。
- ・葉色×茎数値は（現地3か所の平均280は、前年同248の113%）茎数と同様にやや高い。
- ・イネミズゾウムシの発生は4か所中2か所で確認されている。

3 技術対策

苗調査時は、草丈は低かったが、気温が4月から5月中旬まで平年よりやや高く、5月中下旬の日照時間が少なかったことから、本田での草丈は平年より高くなった。茎数、葉令、葉色は平年並であることから、苗の時点よりもやや軟弱徒長気味の生育状況となっている。

また弱い降雨が継続的にあることから、いもち病や紋枯病の感染拡大が懸念されるため、これまで育苗箱処理剤等を散布していない場合は、予防的に地上からの散布に努める。

気象庁による令和3(2021)年5月27日発表の「向こう1か月の天候の見通し 関東甲信地方（5月29日～6月28日の天候見通し）」では“気温は高く、降水量は平年並、日照時間は少ない”確率が高いと予想されている。今後、葉色×茎数値を適正範囲に維持するために、以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

コシヒカリ：目標とする茎数（穂数）360～380本/m²（目標収量540kg/10a、総粒数30千～32千粒/10a）、とちぎの星：目標とする茎数（穂数）390本/m²（目標収量600kg/10a、総粒数29千粒/10a）を確保するまでは、夜間かん水、日中止水（浅水）として水温・地温を維持し、分げつ発生を促進する。

平年の間断かん水開始時期は6月第2半旬である。ほ場を観察し、目標茎数が確保でき次第、間断かん水に入る。

白未熟粒の発生を防止するとともに、登熟度を高めて良質米を生産するためには、適正粒数を確保することが重要である。初期の茎数が多く、過繁茂気味の生育になると粒数過剰となり、食味、品質の低下を招くおそれがある。適正粒数確保には間断かん水に入る時期が重要となるので、遅れないようにする。

(2) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

ヒメトビウンカのウイルス保毒虫率は、県平均が 5.0%で 10%を超える地点も確認されている。今後の気温も高いことが予想されることから、本病の発生拡大を防ぐため、地域ぐるみでのヒメトビウンカ防除（発生の多い地域では、箱施用剤の使用+本田での薬剤散布）を実施する。

イ イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ

イネミズゾウムシの発生が目立つほ場（移植後 2 週間の水田における成虫密度が株当たり 0.5 頭以上が要防除水準）では、有効な薬剤により防除を行う。

多雨で湿度の高い日が続くとイネドロオイムシの幼虫発生期間が長引き、多発生になりやすいことから、今後の天候と発生状況に十分注意する。

ウ いもち病（葉いもち）

作物体の濡れが持続することで、いもち病や紋枯苗の病原菌（カビ）の萌芽や伝播が行われて被害が拡大する。強い降雨では菌が流れてしまうのに対し、持続的な弱い降雨は感染拡大に好適な条件である。予防に加え、発生時には速やかな薬剤散布を行う。

取り置き苗は、いもち病の発生源となるため、早めに処分する。

(3) 雑草防除

中期除草剤の散布は、ラベルを十分確認し、使用時期に注意して散布する。

なお、MC P B等を含む除草剤は低温、シメトリンを含む除草剤は高温で薬害が発生しやすいので注意する。

除草剤散布時の水管理は、散布直前に水深 4～5 cm とし、散布後 7 日間は、落水やかけ流しをしないよう注意する。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)

4～6月は春の農作業安全確認運動の実施期間です。



シートベルト・ヘルメットの着用徹底
熱中症予防のため、こまめな休憩、水分補給、警戒アラートの利用の促進
作業員への、家族や仲間からの「声かけ」（注意喚起）実施
万一の事故に備えた労災保険の加入促進